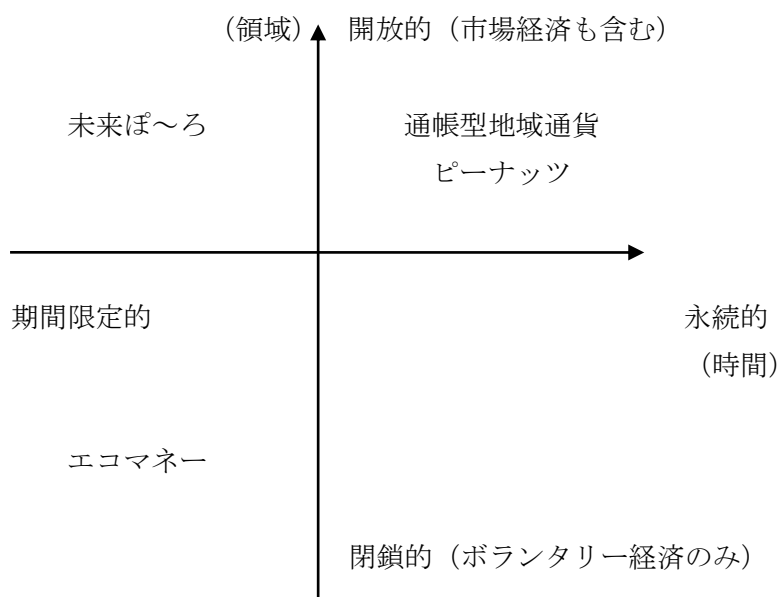


第6章 考察

第1節 「とくいの銀行」の位置づけ

先行研究において、各地の地域通貨の例をいくつか挙げた。それらを通貨が使用される領域と使用可能な時間という軸で分類したところ、以下の図のようになった。

(図6-1) 各地の地域通貨の分類



本研究では、通帳型地域通貨ピーナッツを基本とした第1次計画「まちなかぼ〜ろステーション」を立て、ボランティア経済の活性化を主に目指した半永続的な地域通貨の導入を目指した。その際、目的達成のため、なるべく（一切ではない）市場経済領域に踏み込まないようにしたため、第1次計画は大まかに言うと第4象限に位置していた。

しかし、第1次計画の発表、評価の段階において、参加者の方々から否定的な意見が相次いだ。それらを解消するべく、改善点を盛り込んで提案したものが「とくいの銀行」を基本とした第2次計画案「まちなか とくいの銀行」である。

「とくいの銀行」は、擬似通貨を用いない点では地域通貨と大きな違いを持つ。一方で、参加者の「できること」に価値を見出し、それらを求める他の参加者とマッチングさせるという内容に関しては、地域通貨とほぼ同じである。

そこで、本研究で筆者が実施した「まちなか とくいの銀行」を先の図に照らし合わせてみたい。扱うもの・サービスの領域は第1次計画と同様に、ほぼ（一切ではない）ボランティア経済であり、（通貨は用いないため）実施する期間も第1次計画と同様に半永続的である。このように、擬似通貨を用いない点以外では第1次計画の地域通貨と同様の性格を持つ「まちなか とくいの銀行」も、先の図における第4象限に位置することが分かる。

第2節 地域通貨と「とくいの銀行」における比較——内外の交わり

地域通貨では参加者が登録した「できること」の価値を擬似通貨で表した。「とくいの銀行」には、擬似通貨が存在しない。その代わりに、それぞれの参加者が預けた「とくい (= できること)」自体が価値のあるものとして扱われる。

筆者が第1次計画として提案した地域通貨において、参加者から最も強く訴えられた違和感は、擬似通貨の存在であった。忘れられがちな人の繋がり価値を伝えるために用いられたはずの擬似通貨システムが、参加者にとっては地域通貨に対する興味、関心を削ぐ要因となり、結果として導入にすら至らなかった。

一方で「まちなか とくいの銀行」は、少なくとも第1次計画よりは大きな成功を収めた。人の繋がり価値を見出すという目的も、誰かの「とくい = (できること)」とそれを求める他の参加者とをマッチングさせるという内容も地域通貨と同じである。その差異は、擬似通貨を用いないという点のみである。これは「まちなか とくいの銀行」が、擬似通貨システムにおける複雑さや、それに伴って生じる違和感を解消できたことを意味するのではないだろうか。

また、地域通貨と比較した「とくいの銀行」におけるもう1つの大きな特徴は、1度の引き出しイベントでその取引が完結するという点である。そして、それらが積み重なり、長期的な活動となっていく。地域通貨には擬似通貨の存在があるために、その絶え間ない循環が求められる。そのため、通貨の循環が途絶えてしまうと、それ以前の活動がどれほど有意義なものであっても、最終的に地域通貨は失敗した、と結論付けられてしまう。それに対して、「とくいの銀行」には通貨がないため、その循環に対する義務もない。個々の引き出しイベントを成功させていけば、その間に多少の期間が空いても、穏やかなペースで活動は続いていると見なされる。逆に、1回の引き出しイベントで失敗があったとしても、それが後々までに影響を及ぼすことも考えにくい。そのため、「とくいの銀行」は地域通貨に比べて、成功させやすい仕組みであると言える。

その結果、この試みが複数の商店街を含む富山市中心市街地における、理想的なコミュニティの活性化に繋がったと考えられる。具体的に言えば、当該地域で多くの生活時間を割く、いわば「内部」の人々の抵抗や不安を抑えつつ、彼らと観光客や遠方に住む「外部」の人々との交流の場を当該地域に創出することに成功したということである。このことは、第5章第4節で述べた各引き出しイベントに、内部の人々と外部の人々が混じって参加していることから明らかである。

内部の人々で固まっていれば、一見、人の繋がり価値は満たされているように感じる。一方、外部からは「(当該地域は) とても中心市街地とは思えない」という真逆の声が挙がってしまう。やはり、内部からも外部からも中心市街地であると胸を張れるようになるためには、当該地域に様々な場所から人が行き交うようになる必要がある。この「まちなか とくいの銀行」の試みは、僅かながらその一助となっているのではないだろうか。

第3節 「とくいの銀行」に残された課題

これまで「とくいの銀行」については長所ばかりを見てきたが、課題も残されている。ここでは地域通貨とも共通のものである、2点に注目したい。

まず、参加者全員の出番が確約されないことである。参加者の全員が最初に、「とくい」を預けるが、それらが引き出されるか否かは他の参加者に懸っている。そして、引き出されない「とくい」の方が引き出されるものよりも圧倒的に多い。もちろん、運営側が使われていない「とくい」を誰かに引き出してもらえるように促したり、運営側自身が引き出したりするなど、積極的に介入することもできる。しかし、それにも限界があるため、どうしても引き出されずに眠ったままの「とくい」が出てくる。その預け主が他の引き出しイベントに便乗して参加していれば、「まちなかとくいの銀行」との繋がりは保たれるものの、他の参加者から「あの人は自分では何もしないくせに、便乗参加ばかりしている」という不満が出ないとも限らない。(今回は幸い、そのような不満は出なかったが、茨城での実施例ではあったという。)そして、預けた「とくい」が引き出されることもなく、自分で誰かの「とくい」を引き出すこともない、幽霊参加者がいることも確かである。

次に、運営側に大きな負担がかかることである。参加者を募り、通帳や書類の作成、「とくい」の預け入れ、引き出し、マッチングなどの対応、個人情報管理まで、全てを受けなくてはならない。行政やNPO団体が人員や時間を割くならともかく、商店主や学生など他に本業がある人たちが、停滞することなく作業を進めることは難しい。実際、学生である筆者も時折、運営の事務作業が遅れてしまったり、ボランティアで他の参加者に手伝ってもらったりしたことがある。

ただ、この点に関しては、地域通貨では解消できる場合がある。擬似通貨を支払うことで、単なるボランティアから運営に関わる労働力も取引対象にできるためである。法定通貨と互換性を持つ地域通貨の場合は、さらにアルバイト感覚で手伝ってくれる人員を探しやすくなる。このように、必ずしも地域通貨が「とくいの銀行」に劣っているとは言えない。むしろ、地域通貨(ときに法定通貨的な役割)が、「とくいの銀行」において難しい問題を解決する上で、補完的な役割を果たす場合もある。

したがって、「まちなかとくいの銀行」も地域通貨も、2つの意味で完全なものではない。まず、同じ目的を共有してはいるものの、それぞれの仕組み自体がどちらも不完全なものであり、双方に補完的な役割を果たしているということである。地域通貨では問題となる複雑な擬似通貨システムを「とくいの銀行」は持たない一方、「とくいの銀行」は労働力不足を解消するための有効な切り札がない。それぞれの弱点は、もう1つの手法を用いることで解決される。

次に、先述した不完全さゆえに、地域活性化における万能薬とも言えないことである。これらの仕組みを導入すれば、地域、コミュニティの活性化が確約されるわけではない。当該地域の状態や参加者の意欲、その他の諸条件によって、現れる効果は異なるのである。